

## 総合討論

馬場毅・武井義和・栗田尚弥・堀田幸裕・李長莉・許雪姬

(研究グループ①近代日中関係の再検討グループ)

### 三好(コメンテーター)

本日は貴重なご報告を頂き、有り難うございました。私も中国近代史に拘わるものとして、何点か問題を挙げさせていただきたいと存じます。

まず、栗田先生もお取り上げになっておられますが、「アジア主義」に関してです。「アジア主義」は、この言葉を使う人や使い方によって、それこそ千差万別と言ってよい程の多様な定義づけが行われる程、複雑性をもっていると思います。それをどのように定義なさるのか、お聞かせ下さい。

次に、明治時代の日本についてです。この時代を描いた小説に司馬遼太郎の『坂の上の雲』があることは周知のことと思います。そこでは、西洋の築いた近代世界に参加しようと必死になって駆け上がろうする時代の姿が描かれています。いわば「官民」ともに「坂の上の雲」を目指していた時代として、司馬は明治を描いています。或る意味国家に自分を預けてしまえば疑問を持たずに済んだ「幸せ」な時代であったと思います。この明治という時代を、どのようにお考えでしょうか。そして、その反対にアジア諸国は明治日本をどのように見ていたのでしょうか。また、最近の中国近代史研究では「革命史観」の見直しが進められており、中共による中華人民共和国の成立を終点とする見方は説得力を失っています。これを辛亥革命に限定すれば、当時の「革命派」支援は清朝が倒れて民国が成立した、つまり支援した「革命派」が勝利したからこそ高く評価されているのでしょうか？失敗したならばどうなっていたのでしょうか。これは、梅屋庄吉などを辛亥革命に対する無私の援助をしたとして評価することへの問い直しでもあります。また、孫文の考え方について見てみると、「民族主義」の中味に革命前は「駆除韃虜」といって打倒、

あるいは排除の対象としてきた満洲族などを、民国成立後は「五族協和」とするなど、ご都合主義が見え隠れします。状況が変わったのだから、との考え方もあるでしょうが、原則に拘わるものですので、この点は重要だと思います。これは日本との関係も同様ではないでしょうか。もっとも、日本側も「日支提携」を唱える時に、中国は原料供給地、日本は製品加工地がア priori に措定されており、この通りに「日支提携」が進められるとまさしく日本の帝国主義的進出を容認することになります。その他に戦後、台湾人の日本での学歴がみとめられなかった例があるやに聞いているのですが。

**馬場** 会場からの質問が出されない様ですので、三好先生に言及された方を。おひとは許先生に。何か、先ほど学歴が認められないと出てますので、それについてご意見がありましたら、お答えいただけます。それから栗田先生のおそらく私のも出てますんで、その点はまず栗田先生からお答えいただいて、それから私もお答えをしたいと思います。

**許** では三点ほど補足します。学歴が認められなかったというのは、まず一点目は、汪精衛政権、要するに傀儡政権のところでおられた人たちで、審査があって、その審査を通らなかった場合、承認されず認められませんでした。二点目は、満州国などで公務員として勤めた人も認められませんでした。三点目は、台湾の人です。要するに、当時まだ日本統治下だったので、その人たちは漢奸として判断されたのですが、台湾の人はもちろん異議があつて抗議しました。しかし、そうなると、ではあなたたちを漢奸ではなく、戦犯として審判していいかと判断されてしまい、戦犯になるとさらにひどい状況になってし

まいます。このような状況だったことを、三点として補足します。

**馬場** では栗田先生、お願いします。

**栗田** 非常に難しい問題を提起していただいたと思います。皆さんご存じのように、明治国家は外圧の中で成立しました。そのような国家の中で、明治の政治家やオピニオン・リーダー、知識人たちが最優先に考えた課題が、国家の独立と万国対峙という問題でした。そして、この問題と絡んで中国や朝鮮、アジアとの関係をどうするか、という問題も出てくると思います。

三好先生のお話をお聞きして、私の頭の中にまず浮かんだのは、中江兆民の「三酔人経綸問答」です。この「問答」には三人の人物が登場しますが、三人ともそれぞれ考え方が違います。ひとり豪傑君という、まさにアジア侵略説を唱える人物です。それから理想的な平和論、国家平等論を説く洋学紳士、そしてふたりの議論を喜ん聞いている南海先生です。そういった三者三様な考え方の持ち主たちが、同時に一つの場所で酒を飲んでいる。要するに三人とも違う思想を持つてるように見えるんですが、やはり国家の独立とか万国対峙という大目標があってその中でアジアを考えている。彼らは、国家の独立、万国対峙との関連でアジアを考える、という共通項をもって見えます。その意味でアジア主義というものは、単なる二重性だけではなく、もっと多面的にとらえられるべきではないかと思います。実は、私が今回アジア主義という言葉を使わなかったのは、このような思いをつねづね抱いているからです。「アジア主義とは何か」ということを言い出したら、非常に複雑なことになってしまって、ちょっと私の手には負えないなと思ったのです。

ただ、明治初年から大正期にかけての興亜主義については、アジア主義のひとつではありますが、ある程度報告できるのではないかと思います。要するに、「興日」＝「興亜」、「興亜」＝「興日」、そういう考え方で興亜主義については説明できるのではないか、と思ったのです。

もちろん、興亜主義も、日本に重きを置くのか、あるいはアジアに重きを置くのか、要するに重点の置き方によって、いくつかに分類することが出来るだろうと思います。ただ、日本が栄えるためにはアジアが栄える必要がある、アジアの繁栄なくして日本の反映はありえない、という共通項を持っていると思います。

話は戻りますが、アジア主義に関しては、これはまさに戦時中の侵略的なアジア主義から孫文の大アジア主義まで、非常に多岐に渡っておりますので、本当に複雑な問題をはらんでいると思います。それと、日本がどんどん近代化していき、特に日清戦争後はどんどん強国化していく。そうすると、日本はアジア諸国よりも先を歩いている、自分たちがリードしているという考えが濃厚になってくる。そして、日本人のなかに自分たちが進んでいるから、中国やアジアを改革してやるという、言ってみればある種の「思い上がり」が出て来たと思います。ただ重要なのは、昔竹内好先生もご指摘になられていらっしゃいましたが、戦前のアジア主義者は「軍刀侵略主義者」も含めて、日本の運命とアジアの運命を真剣に結び付けて考えていた、ということです。竹内先生は、「戦後はアジアを置いてけぼりにして動いてきた」とおっしゃっていますが、私もそんな気がします。

中国やアジアに対する「思い上がり」は、(たとえそれが善意であるにしても)東亜同文会員のなかにもあったと思います。近衛篤磨は、「日本人は中国を知るべきだ」と言っていますが、現実の中国(中国人)が日本(日本人)をどう思っているか、ということについての配慮が十全であったかどうか…。やはり、「思い上がり」は存在していたのではないのでしょうか。根津一が、1909年12月の東亜同文会秋季大会において、発会決議(「志那ヲ保全ス」)を削除するときの理由のひとつとして、「志那ヲ保全ス」という文言を「日本ガ力デ、志那ノ微弱ナルモノヲ助ケテ維持シテヤルゾト云フヤウニ」中国人が受け取って、「頗ルイヤガル文字」となっていることを挙げていたのは象徴的です。ただ、東亜同文会が、日本の運命を、中国、アジアの運命と密接に結び

つけて考えていたということは、現代から見た場合、やはりひとつの意味を持っていると思います。

今、三好先生は、中国革命が成功するとそれを支援した人々は評価されたが、もし、失敗したら内政干渉として批判されたらと、ご指摘になりましたが、確か東亜同文会内部でも、同じようなことが議論されています。北清事変についての対応を巡ってだったと思いますが、同文会内部ではどの勢力を支持するかで喧々諤々たる論争になっています。結局、「志那ヲ保全ス」の再決議という中途半端な結論で終わっていますが、これなども東亜同文会の会員が、それぞれの立場から、日本の運命を、中国、アジアの運命と密接に結びつけて考えていた結果だと思えます。ただ、同文会員の多くが、中国の情勢やアジアの情勢に、いろいろな思いから、あるいはいろいろな立場から関係しましたが、会員のなかには孫文革命(国民革命)や変法運動に深く関与した人々もいました。結果論的になりますが、孫文革命がなんだかんだ言っても成功したということは、東亜同文会にとっても好運なことだったかもしれません。

東亜同文会が経済中心主義になっていく背景ですが、私は経済の専門家ではないので詳しいことはよく分かりませんが、日露戦争後、ジオグラフィカル(地理的、領土的)な意味での中国の領土保全ということが、列強間の大勢になっていったということと関係があるのではないのでしょうか。ジオグラフィカルな領土保全と言っても、真の中国保全ではありません。新たな形の列強による中国侵出が開始されるのです。要するに、中国を何らかの形で経済的な束縛下に置こうとする、あるいは、根津一が指摘しているような、キリスト教を利用しての「文化侵略」の形をとる、新たな形の中国侵出が始まるわけです。経済中心主義が出て来た背景には、この新たな形での列強の中国侵出ということがあるのではないのでしょうか。これまでのジオグラフィカルな中国の領土保全ではなくて、もっと深い意味での中国保全が必要である。そういう認識の下に経済中心主義が出て来たのではないのでしょうか。

もちろん、これは「興亜」の為だけではなく、日本の為ということもあったでしょう。

最後に、アジア主義や東亜同文会(同文書院)の評価は、戦後、アジアが戦前をどう見ていたかという問題と絡んでくるのではないかと、というご指摘ですが、全くその通りだと思います。アジアの人々が日本の戦前をどういうふうに見ているかという、やはり日本にとってアジアは抑圧の移譲、あるいは略奪の対象であったという意見が、当然出てくると思います。しかし一方で、馬場先生もご指摘になられていらっしゃいますが、日本がアジアに出て行くことによって、結果的にアジア諸国の独立への動きを助長することになったのも事実です。例えば、インドネシアの場合、ここでは日本軍の軍政が比較的上手くいったと言われてはいますが、親日家が少なくない。確かに国家としての日本は、アジアを抑圧の移譲先、略奪の対象と見ていたかもしれませんが、一方本気でアジアの独立ということ考えた人々がいたことも否定できません。アジアでも、日本は抑圧者、搾取者ではあったが、日本の進出によって独立が助けられたと認識している人々も少なくありません。非常に複雑です。そして、アジアの人々のこの複雑な戦前観(対日観)を考えた場合、アジア主義や東亜同文会、同文書院の評価というのは、本当に難しいものになると思います。ただ、日本人がアジア主義や東亜同文会、同文書院を考える場合、日本人だけの観点だけで見るのはもちろん問題はあると思いますが、逆にアジアの観点だけから東亜同文会や同文書院、さらにはアジア主義を「切る」ということも問題があるのではないのでしょうか。

**馬場** 質問の内容については栗田先生と同じような内容だと思いますので、それに関連するお答えをしたいと思います。まず官軍民が一体となって、同じ方向を向いているんじゃないかという指摘。これは私も賛成です。例えば、荒尾精、根津一は初めは軍人なんですね。なおかつ例えば私が報告致しました義和団の時の連邦国家論ですね。あれについても軍が絡んで

いるところがあるんですね。そういう同じ方向を見ていて、目的が一致してるから割合連携がスムーズにいく。ただそうすると、よく中国や台湾の先生から、要するに軍がそういうこと仕掛けていっているというふうにとられるんですけど、そこがちょっと、ワンクッション置いていただきたいなというふうに思います。その他、惠州蜂起の時に、山田良政以外に宮崎滔天が革命派支持の立場で絡んでいます。東亜同文会の会員および台湾総督府が絡んで将校や武器援助をしようとし、それを山縣内閣が黙認している。そういう意味では軍と、東亜同文会会員の一部が一緒になるんですけど、それぞれの思惑があります。三つで一緒になって軍が絡んでくるんですけど、それがすぐ軍の指導というふうに考えて、台湾や中国の先生方は、それは侵略のどうのこうのという話になるんですけど、そこを少し、ワンクッションを置いて考えてくださいと思います。これが一つ目です。

二つ目ですけど、アジア主義は多義性であるということ。それは私もその通りだと思います。特に今日、栗田先生ですね。アジア主義、近衛だけじゃなくて、当時のアジア主義を位置づけられています。アジア主義は多義的です。ただ私は、東亜同文会のアジア主義、それは具体的にはやっぱり綱領に集約されているんだと思います。ただし、会員の中に幅があります。それから私も竹内好のアジア主義を、若い頃読んで私、あの時知った東亜同文会って非常に評価低いですね。あまり評価されていないと思っていました。だけどやっぱり竹内は、興亜を含めてアジア主義という概念で括っていると思います。そのなかは非常に多様ですけど。東亜同文会についてのアジア主義っていうのは綱領に集約されるというかたちで言うならば、それほど多義性とはいえない。

次に三好先生の発言を聞いて、ちょっと気になるところがありまして。私は東亜同文会内部で革命派支持をしたのは、少数派だと思っています。山田兄弟はまさにそういう意味では例外です。それと関連して、東亜同文会は辛亥革命の直前まで、1910年まで清朝の立憲改革を支持し

ているんですね。それに反して孫文に対する評価は非常に低いんです。それが辛亥革命の後、実は急に共和制云々ということ言い始めて、だけど第二革命始まったら全然孫文支援に動かないのですよ。一部の山田純三郎や宮崎滔天などが支援し、その後孫文が日本に亡命した後も支援しています。しかし第二革命前に、東亜同文会は華族会館で臨時大総統を辞任して来日した孫文の大歓迎会をやっていますが、その後、孫文が袁世凱に対して第二革命をやったら全然動いていない。支援したのはごく少数派です。基本的に、東亜同文会は清末の段階で、清朝の立憲改革を一貫して支持している。直前まで支持しています。最後の段階で見限るんですね。見限って、その後、孫文が来た時に大歓迎会をやったけれども、第二革命始まるまで全然動かない。それが基本的なスタンスであって、東亜同文会で革命派を支持したのは少数派であると思います。今、中国近代史ですね、従来の革命史観というものを批判されていますが、その中で、例えば東亜同文会が清朝の立憲改革を支持したということですね。日中関係の中で革命派支持ではないけれども、そういうようなアジア主義的なアプローチをしたというのは、それはそれなりに評価すべきだと思います。それから孫文批判については、これは以前から言われていると思います。ご指摘の点でいえば、今までの解釈だと、革命以前は反満のナショナリズムですね。そういうある種の種族主義的な批判をやって清朝を批判して、それに集中し、革命が成功したら、五族、満州族も含め、さらに蒙古、あるいは漢族等の五族協和でいこうとした点について、研究史の中で反満、反清朝に集中するというある種の政治戦略的な目的の為にやっていたんだとされている。ですからかたちの上で御都合主義となる。私はむしろ革命前に敢えて反満主義を強調するというのは民族の平等の観点からいかなものかだと思います。それから経済提携ということは、あまり言うべきじゃない。あまり高く評価すべきじゃないという指摘ですが、確かに中国は原料供給国で、日本はそれを提供される生産国だという。そういう分業の上で成

り立っている議論が、東亜同文会内部でも往々にして行われています。それは事実です。ですが、先ほど報告しましたように、欧米諸国による分割という中での経済提携を重視しなくちゃいけないという議論だったと思います。先ほど私の報告で、日中同盟論から日中提携論へ、その日中同盟論の内容が非常に露骨な、要するに第一次世界大戦、欧米が中国に手を出さない、手を出す余裕がないので、露骨な日本の権益、拡大ですね。詳しくは私の読んで頂きたいですけど、これはまさに21か条と非常に重なっている部分が多い。その後、第一次世界大戦終わったところでの経済提携論でありまして、これは確かに原料供給地と生産地という、そういう分業を前提にしています。それはその通りですが、それは今言いました露骨な利権拡大の21か条の手直しとして出てくるということを私は見なくてはいけないだろうというふうに思います。

それと最後に、これは三好先生ではありませんけども、中国革命と日本国内の変革の関係についてですが、宮崎滔天が非常に明確だったと思います。自由民権の挫折で、国内でそういう変革の可能性がなかったのでアジアの変革をやって、それがやがて日本にという、ある種の世界革命論です。宮崎滔天は。ただし例外です、こういう人は。先ほどの民権から国権へという、対外的に侵略のほうにいく人はいるんですね。自由民権が挫折して、民権左派と言われている大井憲太郎なんかも。だけど宮崎滔天は、まずアジア革命、中国革命やって、それを日本に影響及ぼすという。だから彼はそういう意味では日本の政治的、経済的利権を拡大するという方向に動かないんですね。だから孫文に信頼される。山田純三郎もです。ちょっと私がしゃべりすぎたかもしれないですが、これでお終いにします。戦前については先ほど栗田先生が私の言いたいことを全部言ってくれましたので省略します。まだお答えを、発言の機会がない武井先生、堀田先生、李先生の発表についてどなたかご質問、ご意見ございませんか。では加納先生。

**加納** 愛知大学の加納です。皆様のご発表が凄く具体的でおもしろくて、事実関係が良く分かったということはあるんですけども今回のテーマが、東亜同文会、東亜同文書院と日中関係史の再検討ということで、馬場先生と栗田先生のご発表ではかなりこの「再検討」というのを意識されたご発表で、結論的にもそういったところが非常に明確に出ていたというふうに思います。他の先生方のところでは、かなり具体的なお話であったんですけども、それぞれの事実関係を追っていく中で、日中関係史がどのように再検討されたのかというところを一言ずつ短くご説明頂けるとありがたいと思います。

**馬場** ご発言のない武井先生と堀田先生と李先生、では武井先生から。

**武井** 日中関係史の再検討についてということなんですけれども、私は今回、従来取り上げられてこなかった日清貿易研究所で学ぶ学生の実態をまず明らかにしようというところが、思いが強くてですね。どういう人材を送り出したのかということを見てきました。その点からいうと、東亜同文書院はビジネス界、報道界、外交官などの3分野に主に学生が就職していったというふうに言われてるわけなんですけど、その前身にあたる日清貿易研究所はどうであったのかという点を見ていった場合に、同じく共通するような方面に進む人が多くいたということが明らかにできたかと思います。日清貿易研究所は実態もまだ完全に明らかにされてきたとは言えないんですけども、そういった卒業生の動向を追う中で東亜同文書院の前身的な学校としてとらえ直すことができるんじゃないか。つまり中国に様々なかたちで関わる人材を送り出した、そういう学校と言えるんじゃないかと、そういう結論を持って今回臨みました。また、この総合討論の中で、三好先生、馬場先生、栗田先生のお話の中で、アジア主義の問題とか経済的な問題というのが出てきましたけれども、その点に関しまして自分の中ではまとまっていけないのですが、ちょっとここで触れてみたいと思います。日清貿易研究所

は経済を通じて日中友好、日中関係を強めていくという考えがありました。日中の経済的提携が日中両国の発展に繋がっていく。そういう理念があるんですけども、資料を読んでいくと一方で日本の商権の確立といいますが、商権の回復ということも出てくるんですね。これは一方で中国に進出して欧米からの商権の回復というのがありますし、昨日の報告でも出てきましたが、日清貿易は日清戦争の頃まで清国商人等が独占していて、日本商人が入る余地があんまりなかった。そういった状況の打破ということも言っている部分があります。ですので、例えば日清貿易研究所を巡るアジア主義という問題とあわせて考えてみた場合に、一つには日本が一步近代化をして他のアジアの地域よりもリードしていたというご指摘ありましたが、逆に経済面では日本が清国商人の経済活動より一步遅れていたという点も先行研究で指摘されていたかと記憶していますが、そういった経済面で清国の商人に抑えられ気味になっている状況を回復して、一度日清関係をフラットにして、その上でさらに新たに提携関係を結んでいくというような構想も荒尾精の中にあっただのかなというふうに、資料などを読んで感じる部分もありました。まとまりがない話になってしまいましたけれども、日清貿易研究所をそういった観点から再検討できるのではないかと。またそこまでのいかなくとも、新たな見方が提示できるのではないかと。思いました。自分の中でいろいろと考えている段階ですので、ちょっと雑駁なお答えになってしまいましたが。

**堀田** 加納先生よりご質問ございました、シンポジウムテーマの「日中関係の再検討」と、私の報告がどのようにつながるのかという点につきましてお答えいたします。私の発表した東亜同文会の対朝鮮半島事業というテーマは、馬場先生からご下命を受けたものでございます。また報告の中でも申し上げましたが、本日こちらにおられる先生方とは違い、私はこの分野をこれまで専門的に深く研究してきたという立場ではございません。そこでともかくも、殆どゼロからです

が色々調べていく中で、ロシアの南下阻止が当時の日本における重要な戦略観であり、朝鮮半島が持つ地政学的な現実が、20世紀初頭の日本が置かれた国際環境の中で一時的にしる、東亜同文会にとり事業対象の地として必然性があったということを感じ、結論とした次第です。そこで加納先生のご質問と関連して申し上げますと、まず東亜同文会が朝鮮半島で行っていた活動については非常に先行研究が少ない分野でありますから、ここをひとつ掘り下げるだけでも歴史の再検討につながっていくのではないかと思います。もちろん、朝鮮半島の後ろにはロシアがあり、ここにはロシアの満洲への進出という問題も絡んでくるわけです。近代日中関係は非常に複雑な地域の勢力図が背景にありました。そういった中で、東亜同文会と中国との関係についても朝鮮半島に焦点を当ててみると見えてくる、日本の対外認識を巡る問題があるのではないのでしょうか。これを以て、日中関係を再検討したということで、お許し願えませんでしょうか。それともう一点、三好先生から戦前と戦後は切り離して考えられないのではないかとのお話がありました。今日の報告内容とは直接関係ない話題ですが、北朝鮮におけるいわゆる戦前と戦後の連続性ということで思い出したことがあります。東亜同文会が朝鮮半島で行った教育活動でメインとなったのは、平壤と城津(現、金策市)など北部朝鮮地域に集中しています。もちろん戦略的に考えれば、ロシア・満洲国境とより近い地域に、同文会として関心があったのは当然でしょう。そこで現在の北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国は満洲で活動していた共産主義ゲリラが中心となり樹立した政権ですので、戦後、日本の遺産というのは産業施設を別として基本的には受け継がず、否定する立場です。1906年以降に同文会が設立した学校は統監府に受け継がれ、その後は朝鮮総督府へと運営母体を変遷していきますが、1945年以降どうなったかはさっぱり分かりません。日本時代のものがその後どうなったかは、連続性を否定する故にか余り北朝鮮の記録には出てこないのです。後継校と言えるものが存続しているのかも不明です。

しかし北朝鮮も実は日本の教育を全て否定したわけではなく、有名なところでは、朝鮮人民軍の空軍創設者である李闊という人物が、実はこちら名古屋の守山にあった名古屋飛行航空学校の出身者だと言われています。このように北朝鮮建国後も日本時代の教育機関で教育を受けた人、特殊技術を修得した人というのは恐らくほかにもたくさん活躍しているのではないかと思います。名古屋と北朝鮮の縁ということで申し上げますが、植民地時代に東亜同文会の系譜を引く学校で学んだ人たちも、もしかすると戦後の北朝鮮で活躍されているのかもしれませんが、今後その辺の事情も明らかにしていきたいところです。

**李** 三好先生のコメントについて感想を少し述べさせていただきます。特に梅屋庄吉ですか、宮崎滔天の評価問題について確かに孫文に対する支援、日本人の商人としての活動としての失敗したとしか言えないんです。また三好先生が提示されている、民の生活のレベルから評価していくという視点については非常に新鮮だと感じました。この評価の問題なんですけど、先ほど申し上げましたように私色々考えさせることになりました。ただ商人として彼ら失敗したかもしれないんですが、私的にはおそらく宮崎でも梅屋でも回収できないということ予想してたんじゃないかということがあると思います。それは、彼らは単の商人、一商人だけではなくて、理想を持った人間として、理想というのは、要するに報告の中でも出てきた自由民権を求めるといこと、アジア提携を求めると、あるいは日中を提携して共同して進歩していくというようなことではないか。このような理想はある意味ではアジア主義と言えますし、彼らのこのようなアジア主義は孫文のアジア主義と一致してるというところから、このような孫文に対する支援活動を可能にした。しかもこのような活動は彼らの個人の利益、あるいは家族の利益を超えたものとなっています。このような人物を考えるときはこういう側面、こういう点を忘れてはいけないんじゃないかなと考えています。だからこそ今日の中国の人々、あ

るいは歴史学者などは彼らを高く評価している理由ともいえるのではないかなと思います。最後に民の生活のレベルからこういう問題を考える時は、民とは何かということを考えると、民族、民族国家を超えたアジア共同体という意味の中の民であり、彼らのそれぞれの人々の長期に渡り共同な利益を考えた上でこの問題を議論することを通してこのような人物を再評価すべきということを考えてます。歴史人物の評価は大変難しいことと思うんですが、日中関係に限って言うと近代から見ると国力、国の強さという、強いか弱いかっていうのはかなり大きな影響要因となってると思います。例えの話ですが、100年が経って中国が世界に一番強い国になった、一番の大国となった時、また日本は相対的に国力が弱め貧弱な国となった、どうでしょう。仮にその時は孫文一郎という名前の日本人が現れてその助けが求めてきたときは日中両国の関係どうなるでしょう。ここで一つ、中国でよくある冗談話なんですけど、日本沈没という映画あります。小説もあると思いますが、例えば本当に日本沈没となったら日本人が逃げるところか、どこだろう。やっぱり中国が一番近いということで、実際にそうとなったら中国の人が日本人を助けて受け入れてくれるかどうか、そういう問題が出されるとこっちはおそらく99%の中国人は受け入れるだろうという。これは要するに個人の利益とかではなくて、それを捨てて人類共通の価値を反映する、表れるようなことで助けていく。これはグローバル化となってる今日の社会にも特に重要なポイントではないかなというふう最後に申し上げます。

**馬場** それでは質問を簡単をお願いします。時間が過ぎているものですから、簡単に答えて頂きたいです。

**質問者** やめてもいいような質問なんですけど、せっかくですので。今朝、武井先生の話で日清貿易研究所の教育の話があったんですね。勉強するものに清語学とありました。それは卒業生たちが日清戦争後の台湾へ従軍した時、

通訳して通じたのかどうかという言葉の問題として、先ほど質問に挙がっていました。そこちょっと聞きたいんですけど、中国語ってどういう中国語を教えたのか知りたい。例えば当時のテキストってあるはずですよ。テキスト使ったとして、もし記念センターに保存されているものがあつたら見てみたいということですよ。というのは、ご承知のようにこの間中国が統一されて、この間と言ったって、もう60年以上前ですが……。それで初めて言葉が統一したわけですね。毛沢東が一番気にしてたのがそのことだったんですよ。当時は上海に日清貿易研究所や同文書院があつたとのことですが、現地の言葉はマンダリンじゃなくて上海弁で、この二つは今でも全然違うわけですよ。そういう中でどういう勉強をしていたのか、ということが非常に気になるんですけど、お聞きしたい。よろしくお願ひします。

**武井** この言葉の問題に関しては、本学の非常勤講師の石田卓生さんという方が日清貿易研究所・東亜同文書院の中国語教育について研究しておられますが、日清貿易研究所時代の中国語教育とか教科書について触れておられます。私も以前読んだんですけども、日清貿易研究所で使われた教科書に、御幡雅文という長崎県出身の人が編纂した『華語跬歩』というのがあります。御幡雅文は日清貿易研究所の教員で、後に設立初期の東亜同文書院でも三井物産に勤めながら中国語教員を務めた人物です。この方が今申し上げました『華語跬歩』という教科書を作り、それをもとに研究所では教育されたようです。ただ、その内容が北京語だったのか、上海語だったのかについてはちょっと今正確には思い出せません。申し訳ございません。

**質問者** 今おっしゃった石田先生が書いたものなどはどこかで見れるんですか。

**武井** はい。『同文書院記念報』の前号にも載っております。

**質問者** ありがとうございます。

**馬場** 時間が過ぎておりますので、簡単に質問して下さい。

**藤田** 東亜同文会と東亜同文書院なんですけど、東亜同文会発行の『東亜同文会報』という月刊機関誌を見たことがあって、最初の頃は北朝鮮の話もそうなんですけども、通信員を派遣して新鮮に東アジアの情報収集をすることに非常に積極的なんですけど、そういう状況が明治の後半ぐらいから非常に縮小し、後になると清国や民国の本を出版するほうに中心を置くとかたちで機関誌が変わっていくのですね。ということは、東亜同文会そのものの経営の在り方という、そのあたり、私、いま大正、昭和も興味を持っていますが、その後、どのように推移していったのか関心があります。財政的な基盤の関係がやっぱりある。そんな中で書院経営も、やがて私費生を募集して、それで少し財政基盤を強めていく対応もしています。そのような意味で、東亜同文会そのものは、全体の動きの中で、どのようなスタンスになっていたのか。財政基盤はどうだったのか。日本のジャーナリズムの中で、あるいは意思決定の中で、どの程度のウエートも持っていたのか。政策の話もいろいろ出てきましたけども、本当にその政策絡みのことをやったのかとか、山田良政のような行動派の人たちが出てきていないのかなと想像するんですけど、ですから、そういう意味で、今後の皆さん方研究者の中で東亜同文会のポジションといいますか、そういうものを広い視点から研究していただけたらと思います。これは私、明治の状況だけしか見ていないんですけども、ちょっと意外だなと思ったところもあったものですから。最後に少し感想を、皆さんの今後の研究への要望です。

**栗田** 今後の宿題として受けとめます。

**馬場** すでに時間が過ぎておりますので、ここで閉会の言葉をさせていただきます。日曜日の最後までご参加いただきまして、休日にも関わらず2日間ご参加いただきましてありがとうございました。